

宗 ティンティン*

Ting Ting ZONG *



中国少数民族地域伝統音楽の継承問題について

—麗江市ナシ古楽の継承問題を事例として—

The Succession Issue of Traditional Music of an Ethnic Minority Area In China

はじめに

2002年から現在まで筆者は中国雲南省や貴州省に居住する苗族の「飛歌」、侗族の「琵琶歌」、チベット族「锅庄舞」、ナシ族の「納西古楽」を主に調査してきた。これらの音楽はそれぞれの民族固有の民族芸能であり、表現の仕方、曲旋律の発展、披露する場も当然異なっている。しかし近年この四つの芸能が同じ危機に直面し、継承者不足の問題はますます深刻になって来た。せっかく何千年、何百年も続いた音楽なのに筆者たちの世代で消えて欲しくないと思い、2001年以来最も頻繁に調査してきた麗江大研納西古楽の現状及び課題を事例として、継承者不足の問題を少しでも解消するために、本研究ノートを書く事にした。

1. 麗江大研ナシ古楽における継承の仕組み

現在大研ナシ古楽会の一番の懸念は、高齢の演奏者たちが次々と亡くなりつつある現状である。

麗江にフィールドワークで行くたびに、悲しい知らせが入ってくる。大研ナシ古楽会は現在かなり高齢化が進み、楽団の24人のうち9人が70歳以上の高齢者である。毎回の現地調査の最後に、「次回に来る時には会えないかもしれない」と、いつも老演奏家たちが筆者に語り

かけてくれる。

80年代後半になってからナシ古楽は民間の集まりから舞台音楽に変わり、毎晩演奏される一部の曲目以外には、過去の儀礼音楽の多くの曲目には使用されていないため、徐々に演奏されなくなっている。ツーリストコンサート開始後に入ってきた奏者は、毎晩演奏するナシ古楽の曲以外には、他のナシ古楽の曲目を殆ど知らないことがアンケート調査で明らかになった。演奏会以外に、ナシ古楽に関する学習をする機会が全く与えられない状態である。老演奏者の逝去によって、ナシ古楽そのものの一部が消えていくという厳しい現状である。若い伝承者の育成が今後の重要な課題として迫ってきている。

ナシ古楽で従来からよく使われている伝承法は「口伝」と「譜伝」であり、伝承する組織構造は「模倣伝承」、「家族伝承」、「師弟伝承」、「楽譜伝承」という4つの形式である。

麗江地区のナシ古楽の中で、最も多く採用されている伝承法は、模倣伝承と楽譜伝承をミックスしたものである。

2017年現地調査によると筆者が2003年調査していた大研ナシ古楽会の60歳以上のメンバーは現在生存している演奏者は27名から6名に減り、2016年の調査では毎日の公開演奏から週に3回まで減っていた。では、約500年の

*中部大学国際関係学部国際学科

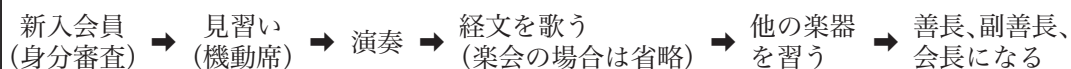


図1 模倣傳承法の経緯

間にナシ古楽はどのように伝承してきたのか挙げていきたい。

① **模倣傳承法** この方法は、ある意味で口伝でもあり、新しく入会した会員は、楽会がおこなわれる時に、「機動位」という席に座り、聞きながら学習する。その技術の習得が認められたら、楽器を手にして、楽団の演奏に参加し、楽曲を覚えていく。楽器の奏法が身に付いたら、次は経文の内容を暗記し、皆について歌い始める。もし余裕があれば、他の楽器の奏法も覚えていく（図1参照）。現在の大研ナシ古楽会の老演奏家たちの殆どが、このようにして楽器の奏法を覚えたのであり、中には、複数の楽器を演奏できる奏者もいる。

1940年から現在まで、社会環境の変化に伴い、ナシ古楽は何度もその盛衰を繰り返してきた。今では、古くからの家族継承というスタイルも崩壊しつつある。1986年頃から、大研ナシ古楽会のある古城辺りでは、ツーリストコンサートの開催によって、ナシ古楽の継承は少しずつ復活していたが、全く観光化されてない山岳部にある古い楽団では、実は現在、模倣や口伝という伝承法は大きな危機にさらされ、古楽の伝承は消滅寸前という状況にある。

一例を挙げよう。2004年8月、筆者は玉龍納西族自治州・巨甸鎮「金沙江畔巨甸古楽会」で古楽の継承問題について調査した。巨甸古楽会は、1949年以後、主に葬式の中で古楽を演奏したため「江辺古楽」と呼ばれていた。ナシ古楽と同じ系列に属するが、大研ナシ古楽会で演奏される古曲より、もっと素朴な儀礼曲が多く残されている。江辺古楽には、従来から伝承

する楽譜がなく、詞だけ残されていた。楽器の演奏の方法や曲の歌い方は完全に口伝という単一の方法に頼っていた。それも、家族世襲制で、父から息子へ、息子から孫へと伝えられていた。1949年～1976年まで、古楽が低迷しているときに、こうした世襲による体制が完全に崩れ、楽器の演奏ができる人は何人かいるが、演奏に合わせて、江辺古楽の歌を歌える人は一人しかない。65歳の張紳^{zhang shen}である。彼は古楽奏者であった父親の影響で、48年、49年の時に地元の寺院で演奏していた。56年、57年の時も仲間と演奏していた。その後は古楽の演奏を全く中断し、ようやく80年代から再び演奏を始めた。84年の時に唯一の弟子として江辺古楽の名手李慶三に師事し、歌を習っていた。しかし間もなく恩師が亡くなり、自分が覚えた一部の歌以外の歌は、恩師の逝去とともに消滅していた。

現在、彼は3人の女性の弟子を教えているが、次のように語ってくれた。「3人の生徒は皆村の奥さんであって、普段は皆家のことで忙しいから、一部の曲しか習っていない。この音楽は意外と難しく、こぶしが多いため、優秀な音楽の素質がないと、この多くのこぶしは覚えられません」。

5年前になって麗江県の音楽調査員が巨甸郷に行き、江辺古楽を楽譜に写したが、中国の楽譜を熟知している筆者からみると、とても大ざっぱである。確かに歌の旋律を記録した楽譜ではあるが、細かいこぶしの部分は採譜ができていないという楽譜の限界性を感じざるをえない。

古楽が従来から世襲制を重視する意図については、筆者は十分に理解している。世襲制は、いわば英才教育である。こうした複雑な音楽を覚えるためには、やはり幼い時から耳で覚えさせる必要があった。筆者自身の例として言えば、筆者は6歳から中国琵琶を学習していた。当時、音楽大学付属小学校で琵琶を教わったのだが、授業の内容は琵琶の授業以外に「視唱練耳」という耳で音楽の音程や旋律を覚える練習があった。これは、琵琶の練習と同様に、毎日欠かさない日課であった。そのような筆者自身の経験に照らしてみても、江辺古楽の唱のような装飾音がいっぱい入っている曲を正確に継承していくのは、現状では極めて困難なことが十分に理解できる。張は、「現在巨甸ではこれらの古楽に興味を持ってくれる若い人は少ない」と嘆いていた。もしも不幸にして、今年65歳の張が亡くなれば、仮に楽譜が残ったとしても、この古楽本来の歌を全部歌える人は誰もいない状況になる。大切に伝えられてきたこの貴重な古楽は、今や消滅の危機に遭遇している。

② 家族伝承法 この方法は、麗江市の中心地、大研鎮周辺に今もまだ続いている。白沙細楽とナシ古楽（洞経音楽）の中に普通に見られる方法である。現在の大研ナシ古楽会の中にも親子演奏者が何組かいる。上述した黄麗梅は、今でも父黄尔雅と毎晩同じ舞台でナシ古楽を演奏している。もう一人の笛と二胡奏者楊則民（30歳）も、同じく父の影響で11歳の時に最年少の古楽奏者として入団していた。しかし、残念ながら、彼が高校生の際に父が他界、現在は父の遺志を継いで毎晩古楽で演奏している。楊とよく似ているのは、前代の大研ナシ古楽会会長牛维炯¹⁾氏の息子で、琵琶奏者の牛世光である。彼も父の遺訓で18歳から大研ナシ古楽の演奏に参加していた。これら家族伝承法を受けた三人の奏者は楽団の中でも最も優秀である。技術の面だけではなく、後から入ってきた

若い奏者と比べ、演奏する態度が非常に真剣であり、覚えている古楽の曲数も多い。「たとえ仕事を放棄しても古楽は続けたい」と筆者のインタビューに黄が答えてくれた。古楽に対する熱意が強く伝わってきた。

このように、家族の影響で幼い時から古楽を習った中老年奏者も少なくない。2005年に実施した筆者のアンケート調査の結果では、「古楽を習う動機」として、24人のうち、10人が「父親の影響で」と回答している。他では、「古楽が好きだから自発的に」が7人、「友達の影響で」、「仕事として必要だから」が一人ずつだった。老演奏家は世襲制で古楽を習ったが、現在の若い30代にも同様の動機があることからみると、納西古楽の家族伝承という強い伝統が今もなお存在していることがわかる。

③ 師弟伝承 この方法は、ナシ古楽（洞経音楽）にもよく見られた伝承法である。現在よりも、特に民国初期にナシ古楽が盛んであった時代に、師弟伝承が普及していた。例えば麗江洞経音楽の著名音楽名門出身の周澍が自分の家に古楽を楽しむ舞台を設け、息子の周炳昌も含めて、数十名の古楽の名手を育てていた。その中には、ナシ古楽史に名を残す、牛维炯、楊徳潤、彭耀先、朱清明、周燮虞らがいた。彼らはナシ古楽以後の伝承と宣伝に大きな貢献をしている。

一方、麗江にある長い歴史を持つ大研ナシ古楽会の古楽奏者は、指導者として各地方の楽団に招かれ、楽団創建から楽器の購入、経壇の配置位置、楽器の奏法などを短期間で指導した。例えば大研ナシ古楽団の元老であった和毅安は、ナシ古楽界では大変尊敬された長老であるが、1936年～1945年の約10年間、大研鎮を離れ、「金山郷洞経古楽団」に招かれた。毎年1月～3月、6月～8月が、麗江洞経音楽を伝授する期間と決められていた。金山古楽会は、彼の厳しい指導の下に、今でも演奏技術の高い

楽団である。他にも類似した事例は数多くある。

しかし、1964年～1977年、ナシ古楽が完全に禁止されたこの時期では、こうした師弟伝承も途絶えていた。開放政策が始まってからは、子どものいない老演奏家たちは、人生最後の余力で、弟子を取った場合もある。例えば、長水村在住で現在「白沙細楽」第一人者の和茂根はその一人であった。巨甸郷の張紳も同じ状況で、80年代初期になってから師匠について習っていた。しかし、当時は既に老演奏家の体力が衰えていたため、教える弟子も少人数に限られていた。2000年には、大研ナシ古楽会の和鴻章と楊則民も地方の楽団に招かれ、指導をおこなっている。

2. 大研ナシ古楽会の古楽継承への貢献

大研中国ナシ古楽会は、上述した4つの伝承法を使い、古楽の研究や宣伝及び新人育成などに努めた。特に周辺地区の多くの楽団と比べ、最も大胆な改革は、従来男性に限られていたナシ古楽に、1989年、初めて女性奏者を採用したことである。これは、その後、全てのナシ古楽会が女性奏者を起用するきっかけとなった。では、なぜ大研ナシ古楽会は女性奏者を加入させる必要があったのだろうか。その点について、以下に筆者の考察を述べる。

- ① 上述したように、80年代末には、既に演奏者の高齢化が目立っていた。
- ② 文革の影響で、30歳～50歳の年代の奏者が少ないという継承者の年齢断層現象があって、若い継承者を育てる必要に迫られていた。
- ③ 80年代の後期から、宗教と関わっているナシ古典音楽に興味を持つ若い男性が少なくなった。
- ④ ツーリストコンサートの興隆により、華やかな女性陣を入れると、観客によりいっそう喜ばれるという発想があった。

1989年～現在まで、ナシ古楽会には少なくとも10名以上の女性演奏者が加入している。殆どが30代以下の若い女性である。2016年現在で、舞台に立っている女性歌手と演奏者は合計7人である。

女性の継承者を育てた以外に、ナシ古楽の継承に関する大研ナシ古楽会のもう一つの実績は、1996年7月に成立した「大研古楽会伝習館」の開設である。伝習館は成立以来3期（1期は1か月）の勉強会を行い、無料で幅広い年齢層の人たちに古楽を伝授している（和 2005 p.326）。勉強の期間中、老演奏家たちは毎日生徒に古楽器の弾き方を教える以外に、ナシ古楽史（洞経音楽）、トンバ文化史、麗江地方史、ナシ族の民族史、白沙細楽、ナシ古楽（洞経音楽）で使われる英語、工尺譜の読み方、中国音楽史、西洋音楽史、中国古典文学、詩吟などの講座を開いた。伝習館で教えている指導者は、麗江では著名な14名の老知識人、著名な古楽の奏者であった（孫1998 pp.29-41）。

筆者が調査した限りでは、大研ナシ古楽会のメンバーである宣科、和宏章、王正午などの老演奏家も教師として参加していた。3回の講座に参加した学生は全部で318人で、大部分が麗江市にある中・高等学校の学生であり、それ以外には、一般市民やイタリア、イギリス、アメリカ、日本などからの留学生も多くいた。伝習館の開催は本当の意味でナシ古楽の継承に貢献していた。「改造されていない、純粋のナシ音楽を若い世代に覚えてほしい」というのが当時の伝習館の趣旨であった。現在大研ナシ古楽会で活躍している男性の楊路（40歳）、楊春齡（61歳）の他、20代～30代の女性歌手3人も伝習館で古楽を習った人たちである²⁾。

なお、大研ナシ古楽会伝習館以外にも、「麗江県古楽展演団伝習組」、「トンバ宮伝習組」、「李氏家族伝習組」という3つの伝習館もあった。しかし2000年以来これらの伝習館の活動は殆

ど停止状態である。

上述した若い奏者以外に、大研ナシ古楽会にはもう二人の若手奏者がいる。楊琴奏者「陳潔春」(23歳)と古箏奏者「田向華」(31歳)である。陳潔春は高校卒業後に麗江に来て、18歳の時に楽団の専任奏者となった。古楽団の中では最も若い奏者である。陳は普通の高校生と同様に反発心が強く、現代音楽や映画スターの大ファンである。しかし、ナシ古楽の演奏が始まると、別人のように真剣な演奏者になっていく。

しかし、こうした現代文化に影響された若手の奏者は、今のような古典ナシ古楽には満足できないという意向がみえる。最近若手奏者の中には、ナシ古楽を現代風にアレンジしていくという流行があった。2005年～2006年古楽会の演奏後、彼らは、古城にある、「木子バー」で、電子楽器のキーボードやギター、ドラム、ベースと共演し、「現代ナシ古楽」という名でナシ古楽の伝統曲目『山坡羊』、『八卦』、『浪淘沙』などの曲を演奏している(写真1を参照)。アレンジされた現代ナシ古楽は確かに聴きやすく、若者のリズムに合っていた。大研ナシ古楽

会にいる若手の奏者は、まさに現代音楽と古典音楽の狭間にいる存在である。今後ナシ古楽は、若手奏者によってどのように変わっていくのか、その点に筆者は最も強い関心を向けている。

結び

急速に発展していく中国少数民族地域ではどのようにナシ古楽のような伝統音楽を保護、継承していくのかは我々音楽研究者にとって最も大きな課題だと痛感している。保護と継承していくうち最も忘れてはならないのは音楽の本質である。「音楽を操るのは人間であり、言葉では表現しきれない感情を表す事が奏者にとって一番の魅力である」。政府が保護にあたって制定された政策も大切だがやはり次世代の若手継承者に自民族の伝統音楽を理解させ、継承の使命感を感じながらこのような音楽を心から愛し合ってゆく事は継承の最善方法ではないかと思う。このような気持ちがあれば、伝統音楽を学びたい原動力にもなるだろう。伝統音楽を次世代にバトンタッチするという目標を達成するために、あらゆる手段を理解し、現代技術と結びつき、楽譜の整理と同時に録音や現代風にアレ



写真1 木子バーにおける「現代ナシ古楽」の演奏
(出典) 2006年1月筆者撮影

ンジされる事も重視しないといけない。現代の音楽と結びつき、若者が興味をもつようなきっかけを作る事は保護の第一歩であり、伝統音楽に現代音楽の要素を入れる事で、普及することができる。そこからまた新しい可能性と流派が生まれ、それは継承に対する最も有効的な手段ではないかと思われる。これからも研究者として寛容な目でナシ古楽の継承と変化について見守っていききたい。

参考：宗 ティン ティン 2003年、2004年、2010年、2016年中国麗江大研鎮ナシ古楽団における現地調査ノート

【注】

- 1) 牛维炯：nio wei jun（1933年～1996年）。著名ナシ古楽奏者であり、特に琵琶の演奏が得意である。大研ナシ古楽会の再建の重要人物で、最後に麗江大研ナシ古楽会の会長を勤めていた。彼は古楽以外では地元で有名な皮製品職人でもある。息子の牛世光（1964年～）は父の遺言に従って、1978年古楽会の再建前から琵琶奏者として古楽会に参加して、現在父と同じように皮職人をやりながら古楽の演奏を続けている。最近は大研ナシ古楽会の会長である宣科の秘書を務めている。
- 2) 2006年、筆者のアンケート調査による。